

香川景樹
中空の日記

950

カ2



和歌名所一覽

池本鴨眼大人著

畿内之卦出来

いづれもやまの嶽とてあはれむらむらむとていふよふに
都空りくわひあはれむらむらむとていふよふに
いづれもやまの嶽とてあはれむらむらむとていふよふに
いづれもやまの嶽とてあはれむらむらむとていふよふに
いづれもやまの嶽とてあはれむらむらむとていふよふに
いづれもやまの嶽とてあはれむらむらむとていふよふに
いづれもやまの嶽とてあはれむらむらむとていふよふに
いづれもやまの嶽とてあはれむらむらむとていふよふに
いづれもやまの嶽とてあはれむらむらむとていふよふに
いづれもやまの嶽とてあはれむらむらむとていふよふに

皇都書林

三条通柳馬場東南 坡屋仁兵衛板元

我少去年法音あり馬。奈く東海

かへり 移り此文より此書に記す江門乃

詠多に 吟方 詠。 詠世月けり

伊勢尾活乃よりまをゆるるるありあ事

いよとほろほそし乃日記ありとし 詠こえ

わたりばん 何多記す此より 詠色かた事

佳ふ詠人乃りて 平ハありて 詠より



とせよかきさきうけと申すは、應よりあせうけくそめあ
たふも、あゆみ日影のそりたりたや、影なり通天橋の柱を
つゝせうは、あせうけのそりあ

おきとんかよは、あせうけのそりあ、あせうけのそりあ
あせうけのそりあ

まじりて、あせうけのそりあ、あせうけのそりあ
あせうけのそりあ

あせうけのそりあ、あせうけのそりあ、あせうけのそりあ
あせうけのそりあ

あせうけのそりあ、あせうけのそりあ、あせうけのそりあ
あせうけのそりあ

あせうけのそりあ、あせうけのそりあ、あせうけのそりあ
あせうけのそりあ

あせうけのそりあ、あせうけのそりあ、あせうけのそりあ
あせうけのそりあ

あせうけのそりあ、あせうけのそりあ、あせうけのそりあ
あせうけのそりあ

あせうけのそりあ、あせうけのそりあ、あせうけのそりあ
あせうけのそりあ

あせうけのそりあ、あせうけのそりあ、あせうけのそりあ
あせうけのそりあ

橋川と日守

わさびおきよそり〜ゆとりたれ花とすの格とつひと舞
りよれおふりあ〜うあふら〜と見えよれきら〜時とあこれ
のあ候〜階と〜りて、其まふと〜と〜みま候

大つそれ意れとたつくすを〜く、格、せま〜と唐去つ〜
國府津と〜く、神の浦〜つら

新田雄と〜の神〜ゆと〜た候〜跡〜あり衆
と〜と〜これい〜〜き〜年〜るは〜蓄〜つ〜〜ひ〜と〜
を〜つ〜り、〜候〜れ〜ふ〜と〜れんとん

よふ候〜す〜と〜と〜すれ集り〜う〜風〜々〜時〜あ〜さ〜ら
あか〜の〜ま〜砂〜れ〜と〜り〜蓄〜れ〜〜と〜あ〜と〜を〜れ〜と〜せ神

梅津なる谷を鳴るま〜く、候の酒とむま〜〜時と此隣なる、松原。
庭の松と〜と〜ひひもす遊ひ〜〜き今あや〜い吾あ〜跡〜にり衆
あ〜ひ〜ら〜ひ〜こ〜や〜こ〜ふ〜と〜て、〜つ〜み〜ま〜候〜の〜ま〜の〜数〜る〜と〜ん

また〜つ〜な〜ま〜つ〜〜と〜此れあ〜とお集り〜を〜〜あ〜く〜と〜ん
さて〜ゆ〜と〜れ〜と〜ま〜よ〜あ〜れ〜〜と〜ひ〜わ〜る〜様〜す〜ら〜み〜ま〜候〜や
の〜ま〜て〜ま〜や

と〜城〜い〜ま〜り〜ひ〜ら〜れ〜と〜ら〜せ〜と〜此れ隣〜ら〜ら〜幸〜ふ〜と〜あ〜〜ん
茶川のれり〜り、〜あ〜〜と〜子〜と〜此れ〜〜さ〜、常路二区到ま〜〜し〜と〜い
けら〜ゆ〜り〜と〜い〜と〜脚〜と〜心〜の〜歩〜較〜して〜より〜けら〜と〜り〜と〜い〜と〜い、その
さま〜い〜と〜れ〜と〜也

あ〜人の〜三〜ひ〜ら〜り〜物〜の〜何〜〜と〜れ〜ら〜と〜あ〜や〜と〜ひ〜と〜ん

沖つ波舟しん伊豆此海や天城の島をそとれり
山池温泉

晴るふつともすう海うけの湯本いまや常陸あそん

晴湖落月

影まはしのぬまう草の海此塵ようてさげの月

古寨斜照

ゆよせれ城つりり垣月ううを跡る夕日影をさしたる

石溪乱流

あふたりのいの戯もみれつ岩のまう海此まやけを

神壇老樹

神まは老木の葉はまよひあそひあそひをふらう神

こは画額八景して時象よと書のとをよと又まん人そと波舟、
うよい風とそ葉、雪とふれまよとよ

霧とろと時あまぬくくくくく移まは雪とふり越るる

雨まなりてあれ聲とまよひまよく、夜まの霧乃群小あうく吹

すきふらうく、いよそらうにまよひまよひつて此のれる寺い。

あそん

けいこまよとまよとれくなら霧の二あうまよまよまよまよ

あそぬまよとまよと結まよとて枝まよとすかまよまよ

いてや光行乃まよ記まよ湯本まよ所まよまよりまよまよ

まよまよけくまよまよれく、岩川まよまよりまよまよ、岩のまよ

くまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよ

菅原河のうの其坂よふふまのほりよとて言ふそはれよなる
みまは

若くはよわつ踏さるりさるり此あれとてぬ人なるそなり
うろたは、お授の御とらにらひつげく、此紅葉のせとて
高麗さふも、町の彼りてまては

さうけよわと富士此社まうろそらつてさふは物さけ
のつてさふも、早きりりさるり此まら、菅原権坂の宮まうつ、お
ろそてはよふは、開太總持若乃歌さうくつて、湖水よ
のそつはまれとつみ一乃なるとり、りふ似たり、此まらさす
杉のこけくねとけ、ゆとて物と歌よ、神と此表此

まつとみまは、ふとさあやまらなをたり、とゆさふらひさ、幣
たむたむとてみまは

神や一ぬ君一とぬの二んを一とつらひ一わつむ一とは
こはそのこまら一ほら一は、此太神の御名とて、らつひまは
ふひくさるりまわらや一事と、此のひあさる也、とて開とこゆふ
ふれお葉とてをらやんく、わらやも

この葉おれさふまら一杖と開もふらとて、さるりさるり
おくらなやまらわらえ、やとてさうけさるり、枝風危よまら
七、この家は、さるり湖の水は、さるり、許、端よさるり此表は
けとて、まらささるり、れなまは、まら、このよと、さるり、さるり、
よと、け、歌の中よ、まのひさや、り、と、積の中よ、さるり、さるり

予其人妻此本付一先れと又種あも、申くあつる初そをさす
りて

けつなや五十のまう此は内とをそり、まのころこかなやたり
八日ふなり風きむくうこおりてと種とやます、南やうん
雲やなつひの、一と種と、まうれこやまは、まつ隆らん所
まてとくいてり

隆くも一してふさわる石、此ふんてくろ面れあへれ
まりやとていそくに、まこ風さへんそくして、やうりは隆さけハ
そさへんわうす、びりりつひくく、て、伏見ととて、黄瀬川
なりとよ

常なるはうつーかん、まれ名とえれ、れさり、此は隆く、那

うせとらてみそれ、なりの若くとも、れさ、川はさるん、れ一
みまは

とてとむつ、あ、かすい、馬群のさあ、あ、あ、常と、う、れん
わう、う、て、河津の、宿、一、入、ぬ

あ、は、と、れ、う、ら、と、ゆ、ま、つ、と、あ、あ、そ、り、う、ま、む、よ、一、寒、み、り、け、
車、一、の、ま、と、と、あ、ま、り、あ、や、と、ゆ、わ、ん、く

小、ま、と、う、ゆ、と、さ、ま、や、う、う、ん、な、れ、や、ち、う、ら、み、を、れ、う、れ
な、つ、は、と、て、ま、ま、ふ、あ、ま、り、に、通、さ、る、と、く、ひ、な、と、け、わ、く、あ、り、
と、皆、れ、あ、う、一、は、く、わ、さ、う、て、よ、う、ゆ、さ、た、ら、海、さ、れ、て、う、一、出
た、り、と、や、一、と、げ、ま、の、巻、き、な、る、の、と、れ、り、此、君、よ、こ、ほ、と、ひ
て、ま、い、野、の、な、く、お、り、あ、ゆ、よ、む、さ、一、野、の、ゆ、り、ゆ、り、く、や

乃香原まよげとなり、そのれ霧を霧乃朝をやられと、わきま
らひおとしあやわたりあり、産婦れこめこ乃産とよあひしと
ほりなりれまし、一家をまともやまし、所までいそしう、
みつの産干はあひく、かつと思ひうたふと、おんそく海く
そしれらりす

まよの香霧れわたりありあり、産婦のまよを、わきま
うけ、一袖をよまに、識持をよめれ産也、まともやあひいせよ
まのよられのをきれ、うららうらうら、なつくと産まうと、
草乃誓、れれれ、うららうら、まよと、まよの産婦を産
まよと、うらうら、まよと、まよと、まよと、まよと、
まよの産婦、まよと、まよと、まよと、まよと、まよと、

わきま男まのをまよとて、まよとて、まよとて、まよとて、
なと、福をうたふ、まよとて、まよとて、まよとて、まよとて、
まよとて、まよとて、まよとて、まよとて、まよとて、

十二日、はらめて、巴川、まよとて、まよとて、まよとて、
まよとて、まよとて、まよとて、まよとて、まよとて、
まよとて、まよとて、まよとて、まよとて、まよとて、

まよとて、まよとて、まよとて、まよとて、まよとて、
まよとて、まよとて、まよとて、まよとて、まよとて、
まよとて、まよとて、まよとて、まよとて、まよとて、
まよとて、まよとて、まよとて、まよとて、まよとて、
まよとて、まよとて、まよとて、まよとて、まよとて、

は振あふとよきとていふあつとていふとよきとていふとよきとて

ふね乃志とけりと疎く吾々後世乃志此より朽を辨
じゆに福倉量正ゆ此うまふ乃志とていふとよきとていふとよきとていふ
とていふとていふとていふとていふとていふとていふとていふとていふ
とていふとていふとていふとていふとていふとていふとていふとていふ
とていふとていふとていふとていふとていふとていふとていふとていふ

武士れよあひ乃種のりゆより吾輩此をばとていふとていふとていふとていふ
ふ一の種のりゆ此れ大乃志のりゆありあそれえの志入ん
雲原志ゆとていふとていふとていふとていふとていふとていふとていふとていふ
大津社ま化とていふとていふとていふとていふとていふとていふとていふとていふ
とていふとていふとていふとていふとていふとていふとていふとていふとていふ
あつとていふとていふとていふとていふとていふとていふとていふとていふとていふ

ていふとていふとていふとていふとていふとていふとていふとていふとていふ
ふありとていふとていふとていふとていふとていふとていふとていふとていふ
け種とていふとていふとていふとていふとていふとていふとていふとていふとていふ

安於川とていふとていふとていふとていふとていふとていふとていふとていふとていふ
つとていふとていふとていふとていふとていふとていふとていふとていふとていふ
駿河の安於川の川に此れにのりゆとていふとていふとていふとていふとていふとていふ
あつとていふとていふとていふとていふとていふとていふとていふとていふとていふ
とていふとていふとていふとていふとていふとていふとていふとていふとていふ

田舎ややとていふとていふとていふとていふとていふとていふとていふとていふとていふ
やうていふとていふとていふとていふとていふとていふとていふとていふとていふ
うんんまるとていふとていふとていふとていふとていふとていふとていふとていふとていふ

かきけり

鶴乃尾よなれと海どうり又てふ代のむしれ新やとらん
つていつてあつていぢまもあつてせしそつれりなれ
と香聖ふゆい

新しきはよや出たり母はまりとち新はよくはきよけり
海の中やゆりりもらまは、見付のまのちつて一まつゆりて
柳ゆんととて猶いとくわもみま

一節のてさつてまればま琴乃あつて久よのやよま
くはまもくもまえねはなはまもれすつて、面を新や
まはれいあひひくばひまかやとつてよま

十七日、おはなまをれと風やま、あけをよま、二ま

うゆ

なつれんと又つれれまなは侍やま、ひとふれ坂
大落とゆいは中泉の里ふ川やのふつて、うけ中泉乃とらん
町こたやまの神、おまつみまはま本、まんを智く大伊せり
そのつ、わつは治た寺れたまうらき、園れとらつてまり也
一柳、まひつ、まの、一とあななりとんと、のそはひつ、人
あふま、あつて、はあ、くちひまわ、新やま、今さつてつて
なつれ

なまをさつてまをまらは中のつと神、かなつてらつてまれ
さて流田乃と行無ま、湯屋、お茶乃塚あま、ま、ま、れ、つ、と
なつてつてまをまらつて、橋のたつて、石塔、二層あま、ひと

のりあて

きりりともあきさてよつられをえんをえける
園府むくのちぢるあたり、あはれをえんをえけるに都乃わらにを
神楽屋のうのそむいせり、なつていそりて四つをえける
いそりていそりていそりていそりていそりていそりていそりて
あはれをえんをえけるに都乃わらにを
あはれをえんをえけるに都乃わらにを
あはれをえんをえけるに都乃わらにを

あはれをえんをえけるに都乃わらにを
あはれをえんをえけるに都乃わらにを
あはれをえんをえけるに都乃わらにを
あはれをえんをえけるに都乃わらにを
あはれをえんをえけるに都乃わらにを

ゆきあきと道ふとゆきあきとゆきあきと
五月とゆきあきとゆきあきと
五月とゆきあきとゆきあきと
五月とゆきあきとゆきあきと
五月とゆきあきとゆきあきと

ゆきあきと道ふとゆきあきとゆきあきと
五月とゆきあきとゆきあきと
五月とゆきあきとゆきあきと
五月とゆきあきとゆきあきと
五月とゆきあきとゆきあきと

てきえうらな乃よすくまもすくせうれすわさなうひや

むーすうらなとくうぬかや年のちをねれよりそあはれ也ける

まてりやを都に大嘗會あくねをひん、日れまかろへあててを
うらおのひやうやまこいよりう、ねふまをうらさみよりあま
なれよりうて、まぬ乃月すまわれせ

大君れねわれやあまこいよりねとあまなまこいよりまよ
月をまえん

廿二日、はとよてのり

うらとけくねまより一ねれ終のあま水よりうむまのてうら

ねらに河の兼川をとわちりしく、中家れりうらにたねを、四つ一ねれ
あうらま、うらとあまきたなま、兼川のねをゆりうらあけなま、大

平格をうらう、まをまね音、けうらま家きて、度能のくひのわになら
まよとよて

夕日まひたひくは乃あれわや乃影まへ、ねよりうはまきうらう神

過くねをひよりままに小豆坂のゆ、華れねそのまこくまうのれ寺より
切り乃傳くちらそひくく力再むちせ

志のまこき入まをれんゆの、ふれ繪乃わり、ねんえんまよりなれ

うけとつふ所、うらわを、あつ人、あ後ねれう神、素田寺のねと出む
うらう、まをれひくくまきまぬ、桔梗屋よりあまやうら、ねあつらま
まけねくかうら乃、一景、ねるねうら

久うこれとよての乃一季をうらひきてまねなうまや
こねまはけりてあまをむまひくく、あまひをえんやまえんなま

三よふや

弓建より夫とき此里に神を引あはせとてめくさむたり
葉戸くれに西のろくせい

信申の村橋ふれ面をえんくいとさくれとの里とくひなり
大漢よりよ、ひらりれあまのりてあをれかすれにやそくも
大漢の小ねふきいふれをうもをすあくるるをさくこれ
どひろくたへうりておのろふはより、行きつてひく牛田
出まはどつて陸あかり、城の機中をえあそくく面せりす
うら陸中をぬきてこれ八橋の結んとて、宮れあなるをさ
ゆきは八橋乃里なり、そこの無量寺といふあり、その他は
あまて、冬かきくかまのそとけは、善法とくふり一砂せり

とふ、それより存徳寺はまう、一所たりわたり此れよりゆゆ乃
墓あり、田つちをちとあれひて、其所又ある、ちくそくちか
くく、そこのはよりは、三船海まで、びんをまで、海舟よやく
ま、その時や、泰信りよふらま、なり此をゆかり、そはゆ海
ひく、ゆれひゆ、そは妻遊まらまりて、これあうかひゆん菩
提乃あま大教をわき、むひのあすりの山まで、橋りこん
とせうひて、あををさく、びん、ゆきとく、八所あり、其のゆ
け、橋をえなく、橋をけつさ、より八橋とまう、葉年わ
そんとこれをはく、きく、なす、はま、あま、はよ、ひ
なり、実よ此妻とく、八橋をわ、わけゆん、そこれとさ
人乃、あをそふ見す、ゆより、ゆは、ゆひ、が、乃、ま、ゆ、り、ま

つらねいせりくればとて大抵中々わくを結日の事とて月事れぬ
まふらつそりうの心付てらぬにすく一考られそん事の内と
そのまふゆふてつふゆまはまふまふとけなうの事一れま月
とて一考へたゆ事ふふくゆり、まんやまの事、まはとて
ゆふい今ふあおとけ、まられば外まはまひん、まふまふの
一、つらすまはと程時をたれても何の興うあんとせめてうまや
わ、ゆり、まふ、つら、ゆり、まふ、

文政のそりあれまふす一日、まふ、まれの梅園、つて、つら、ゆり

景樹

四六

文政二年四月

松之丸存藏

書肆

和泉屋幸七
丸 屋善共衛

愛知 県



1103267760